神様が共におられる確かさ

ヨシュア記1章1～9節
2021年5月30日
松田 基子 師

世の中には、偉大な指導者の死によって、計画が頓挫(とんざ)する、組織が解体してしまう等ということが起こることがあります。 そこまで至らなくても、偉大な指導者の死は、大きな痛手です。イスラエルの偉大な指導者、モーセは、エジプトの奴隷であったイスラエル人を、神様の命令と導きに従って、出エジプトさせました。 その後、約束の地、 カナンに向かって40年の間、荒れ野の放浪生活を導き、遂にカナンの地を目前にしたモアブの平野まで辿り着いた所で神様の御許に召されて行きました。

申命記34章5節には、

「**主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。**」

とあり、そのモーセが如何に偉大であったかを34章10節には、

「**イスラエルには、再びモーセのような預言者は現れなかった。 主が顔と顔を合わせて彼を選び出された。**」

と記されています。 神様は、モーセを特別に選び、愛されました。 その事は、

「**主が顔と顔を合わせてくださった。**」

と表現されています。

荒れ野の宿営生活の中で、宿営から遠く離れた所に、臨在の幕屋、別名、会見の幕屋が建てられていましたが、出エジプト記33章9節を見ますと、

「**モーセが幕屋に入ると、雲の柱が降りて来て幕屋の入口に立ち、主はモーセと語られた。雲の柱が幕屋の入口に立つのを見ると、民は全員起立し、おのおの自分の天幕の入り口で礼拝した。 主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。**」

と記されています。

しかし、それは決して、

『神様を人間の顔を見るように見た。』

という事ではありません。 神様は霊なるお方ですから、人間の目で見ることは出来ません。
神様はモーセを特別な存在として、そのご意志が伝わる存在とされました。 神様はモーセにご自身の言葉の代言者としての威力をお与えになったので、モーセは神様の意思と目的をはっきりと理解することが出来たという意味です。 そのことは、民衆が一番良く分かり、それ故に民衆はモーセに聞き従ったのでした。

そのモーセが召されて、いなくなったのです。
申命記34章8節には、

「**イスラエルの人々はモアブの平野で30日の間、モーセを悼んで泣き、モーセのために、喪に服して、その期間は終わった。**」

と記されています。 イスラエルの民は、そこで自分達の目的を見失って離散してしまったのでしょうか。 いいえ、民は神様の約束に向かって進むことを求めました。 モーセは確かに偉大な指導者であり、モーセがいなくなった事は、大きな悲しみでしたが、彼らは自分達の人生は、創造主なる神様に聞き従うことだと、モーセから訓練された事によって、自分達の使命を見失うことはありませんでした。

ここで、大事なことは、

『どんなに偉大な指導者がいたとしても、
人間が人間に依存してはならない。』

ということです。 偉大な指導者は人々を決して自分に依存させません。 人間は人間に依存するとき、必ず失望し、自分の目標を見失ってしまいます。 モーセは偉大な指導者でありました。その中で、最も**偉大であったこと**は、人々を自分に引き寄せず、依存させないで、人々を**神様に結び付けることのみに、力を尽くし続けた**ことです。

そして、自分の限界を認識し、早くから神様の御計画に沿った、自分の人生プログラムを立てて実行してきた事です。 それが後継者の育成でした。 モーセはそのために、ヨシュアを育てました。 ヨシュアが最初に登場するのは、出エジプト記17章10節で、

「**ヨシュアは、モーセの命じたとおりに実行し、アマレクと戦った。**」

とあります。 出エジプトから、葦の海の奇跡を経て、シナイ山に向かうところで、アマレク人が戦いを挑んできました。 ヨシュアはその時、モーセの命令で戦いの最前線に出て、神様の力を信じて勝利を勝ち取りました。 モーセはそのヨシュアを従者として、シナイ山に登り、神様から律法を授けられました。 臨在の幕屋が建てられると、モーセは神様との会見に、幕屋を出入りし、宿営に戻りましたが、出エジプト記の33章11節に記されている通り、

「彼の従者である若者、ヌンの子ヨシュアは幕屋から離れなかった。」

のでした。

イスラエルが最初にカナンの地の入口に辿り着いた時、カナン偵察に、12部族から、各代表12人が送られました。 その土地は大層豊かであったにも拘わらず(かかわらず)、偵察に行った中で10人は、その地の住人に圧倒され、自分達の貧弱さに、戦いの自信を失って、悪い情報を流し、民の心を挫(くじ)きました。 一方ヨシュアとカレブは、

民数記14章7～9節で、

「われわれが偵察して来た土地は、とても素晴らしい土地だった。 もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあの土地に導き入れ、あの乳と蜜の流れる土地を与えて下さるだろう。」

「ただ、主に背いてはならない。 あなたたちは、そこの住人を恐れてはならない。 彼らは我々の餌食に過ぎない。 彼らを守る者は離れ去り、主が我々と共に居られる。 彼らを恐れてはならない。」

と、信仰的大胆さをもって、民衆に訴えました。

民衆はそんなヨシュアとカレブを、

「石で打ち殺せ。」

と言ったのですから、二人は神様の御言葉に従うためには、命も賭ける信仰を持っていたことが分かります。

モーセは偉大な指導者であり、神様の力を与えられた預言者でしたが、その偉業を成し遂げて行くうえで、従者ヨシュアの現実的な助力が欠かせませんでした。 モーセは、このように、早い時期から、後継者を育成しています。 一方神様は既に、ヨシュアを選んでおられました。

その事がはっきりと分かったのは、申命記31章14節において、

「主はモーセに言われた。 あなたの死ぬ日は近づいた。 ヨシュアを呼び寄せ、共に臨在の幕屋の中に立ちなさい。 わたしは彼に任務を授ける。」

と命じられました。 モーセはそれにより、ヨシュアに按手したことが、34章9節に、記されています。

そのヨシュアに、神様は申命記31章23節で、

「主は、ヌンの子ヨシュアに命じて言われた。『強く、また雄々しくあれ。 あなたこそ、わたしが彼らに誓った土地にイスラエルの人々を導き入れる者である。 わたしはいつもあなたと共にいる。』」

と、その使命を告げておられます。

モーセは神様からの召命を受けた時に、色々と理由を付けて尻込みしました。 ヨシュアはモーセの苦労を最も近くで見てきただけに、その大変さはよくよく分かっていましたが、ヨシュアには、神様に対する絶対的な信頼と献身がありました。 また、

『神様の約束をこの身で体験するのだ。』

という積極的な信仰がありました。

そのヨシュアに神様は、

ヨシュア記、1章1節を見ますと、

「主の僕、モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。

『私の僕モーセは死んだ。 今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。』」

との命令を与えられました。

モーセの後継者に立てられたヨシュアに、まず与えられた務めは、全イスラエルを率いて、ヨルダン川を渡る事です。 ヨルダン川はヘルモン山を水源として、全長425キロ、ガリラヤ湖を通って、死海に注いでいますが、死海は海抜下約400m なので、川は急流です。 ヨルダンとは、降下すると言う意味だそうです。 でも、モアブの平野の辺りは、死海の河口に近く、普段の流

れは、気にならなかったでしょう。
しかし、3章17節によりますと、時は春の刈り入れ時でした。 ヘルモン山の雪解けで、川は増水して、流れは速く、渡る事が困難に思われました。 それに、何よりも、イスラエルの民は、40年の間、荒れ野を放浪してきて、第二世代は、短い期間の雨期にだけ出来るワジと言われる涸れ川しか知りません。 彼らは川の生活を知らないのです。 その人達をどの様にしてヨルダン川を渡らせることが出来るのでしょうか。 しかし、ヨシュアには、40年前、出エジプトの直後、追い迫ってきたエジプト軍を背にして、葦の海が二つに別れ、そこを通って来た体験がありましたから、神様が必ず何らかの方法で、渡らせて下さると確信することができました。

神様からの次の言葉は、1章3節の、
「**モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所を、すべてあなたたちに与える。**」
との約束でした。 神様はイスラエルの民を自立出来ない、野放図な生き方をさせるために、選ばれたのではありません。 神様の民に選ばれたのは、神様の御言葉に聞き従い、世界をより良きものに、御心に適う世界に、築き上げて行くために、選ばれたのです。 ですから、足の裏で踏む、つまり、与えられた約束に向かって、神様に信頼して、全力を尽くして努力することが求められています。 神様を信じる生き方は、決して棚ぼたではありません。 こう言いますと、
「では何の為に神様を信じるの！！」
と聞く人がいますが、その質問はそもそも
『人間が何者なのか。 人間の真の生き方、幸いが何処にあるのかと言う事が分からず、自分の願いを生きることに、幸せを求めているからです。』
人間は神様に造られ、生かされているのですから、**神様の言葉に聞かなければ**、人間の**真の幸いは分かりません**。 神様は真の幸せを与えようと、先に恵みを備えて待っておられます。

神様はイスラエルに対して、大きな祝福を約束されました。 その受け継ぐ土地が、1章4節から記されています。
「**荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。**」
とあります。 ここには、地中海の東側を北上して、北東のユーフラテス川まで、広範な地域が示されています。 この地域を支配したのは、ダビデ、ソロモンの時代とされます。 神様は大きなビジョンを与えて、神の民が約束を信じて、足の裏で踏む、つまり、全力を尽くして努力して行く事を求めておられます。

5節には、
「**一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。**」
岩波訳では、
「**あなたが生きている間、誰一人として、あなたに立ち向かえる者はいない。**」
と訳されています。 なぜなら、
「**わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。 あなたを見放すことも、見捨てる事も無い**」
との宣言です。 **神様が共にいて**くださる。 **この事に勝る力と、祝福はありません**。 神様は、目に見えませんが、信じる者を守り、助け導いておられることは、神様を信じ、従って、生きて来た人の人生から、伝わって来ます。

ヨシュアは、モーセの従者として、神様が如何にモーセを心に掛け、ご自身の約束を忠実に守り、御業を表してこられたか、その事をモーセの側にいて、誰よりも一番よく見てきたのです。 ヨシュアは確証済みでした。 モーセと共に居られ、働き導かれた神様は、今度は自分を用いて、導き働いて下さるということに、大きな畏れと喜びが湧き上がってきました。 神様はヨシュアを励ましておられます。 6節に、
「**強く、雄々しくあれ、あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。**」と。
ヨシュアは自分の使命が、土地取得にある事を自覚しています。

すると神様は7節に、
「**ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた、律法をすべて忠実に守り、**

右にも左にもそれてはならない。 そうすれば あなたはどこに行っても成功する。」
と命じられました。 **カナンの土地取得の目的**は何だったでしょうか。 神の民に選ばれたイスラエルが心から神様を愛し、畏れ敬い、神様の御言葉に聞き従って、**神様が求めて**おられる、**愛**と**平和**と**正義**と**平等の実を結んでいく、国**を**築いて行く**ことです。

そのためには、何よりも、神様の御言葉に聞くことです。 8節には、
「**この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。 そうすれば、あなたは、行く先々で栄え、成功する。**」
とあります。 成功するは、岩波訳では、
「**勝利を収める**」
と訳されています。

律法は本来、神様が神様として崇められ、人が人として、尊ばれ、自然が大切にされて行くために与えられたものです。 律法が守られることによって、生ける者全てが幸せになれるのです。神様は、そのような世界を築くために、世界を創造されましたのに、人間の罪が世界を汚してしまいました。 神様は常に、世界の回復を願って居られます。 神様はヨシュアを繰り返し、励ましておられます。 9節に、
「**わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。 うろたえてはならない。 おののいてはならない。 あなたはどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。**」
と繰り返し、約束をお与えになりました。

神様が共に居られる。 この事に勝る力はありません。 この一事を確信し、ただ、神様を見つめることによってのみ、勇気と力が与えられ、ひるむことなく前進することができます。
ところで、わたし達は大きな問題や試練に襲われますと、心配に支配されて、動揺してしまいます。 しかし、そういう心を抱えながら、神様に寄り縋って(すがって)、神様からの助けを求めて行くのですが、そうしますと、神様は、
「**わたしはあなたと共にいる**」
と言う、その御声を、心の内に、響かせて下さいます。
必ずその**御声がある事を信じる**ことです。
ヨシュアは、この後、その御言葉に賭けて、イスラエルの民に、ヨルダン川を渡らせ、約束の土地取得を実現させて行きます。 神様に全信頼し、**御言葉に賭け**て**歩み出し**て行って**始めて**、神様の約束を**手にする事**が**出来ます**。 神様は私達にも、
「**わたしはあなたと共にいる**」
と励まし続けて下さっています。 この地上の旅路は、様々な戦いの連続ですが、わたし達も、この一事を確信し、天を見上げて、地上の旅路を戦い抜き、約束の地、天の御国へと、導き入れて戴きましょう。

お祈りを致します。
恵み深い天の父なる神様
あなた様はご自身の民を愛して、良き指導者を与え、約束の地をお与えになるお方です。

今日、私たちには、最高の指導者、
贖い主であるイエス・キリストをお与えになり、
天の御国へと導いて下さることを感謝致します。

如何なる試練の日も、
「**私はあなたと共にいる**」
との御声を聞いて、主の守りと導きを確信して、歩み続ける者とならせて下さい。

この祝福を愛する方々お一人おひとりのうえに、豊かにお注ぎ下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。
アーメン。